キャンパスの四季　Four Seasons in SHC　(No.11)　2014/07/20

＜台風一過＞梅雨空が掃われ空気も澄んで富士を久しぶりに眺めることができました。まだ頂き付近には雪が残っていて手前の雑木林の緑と合わさってみごとです。

＜梅雨の晴れ間＞日向の暑いこと暑いこと。そんな時、風がさぁーと吹き渡りカラムシの大きな葉が翻るさまは一服の清涼剤になります(注)。近くではキアゲハの５齢幼虫が“われ関せず”と葉を食べていました。この芋虫は「オレ様を食べると危ないぞ！」と小鳥たちに模様の派手さで知らせているのでしょうか。

（カラムシ）日本では有史以前からその繊維を使ってきたようです。今でも小千谷縮（ちぢみ）、越後上布（じょうふ）や薩摩上布などの織物の原料になり青苧（あおそ）、苧麻（ちょま）などと言われます。　→＜カラムシ＞

野辺ではアカツメクサのピンクの毬のような花が咲いています。四つ葉を探したり花輪を作って遊んだりその上に寝転んだりするのはシロツメクサです。アカツメクサは茎が地面から立ち上がりそこに葉や花を付けているためか、シロツメクサのような優しい柔らかさを感じません。ところでこのツメクサは“爪草”でなく“詰め草”（注）。江戸時代にガラス器などをオランダから船で運ぶときに割れないように詰めものにしたのが日本中に広まったようです。

(ツメクサ) “爪草”は尖った葉が鳥の爪に似ていることから付けられたナデシコ科の一年草。小さな白い花をつけます。“詰め草”はマメ科の多年草です。

＜キアゲハの５齢幼虫＞

＜縁：ゆかり＞まん丸くて表面にツブツブのある赤紫の実が路面にいっぱい落ちているのを夏の暑い盛りに見かけたことはありませんか。甘酸っぱいヤマモモの実です。この木は漁場を豊かにするため栄養分を運ぶ川の上流に植林されたり、樹皮を生薬として使うなど昔から大切にされてきました。本学にも縁のある樹で、創立者米田吉盛先生が故郷から移植された大木が横浜キャンパスに植えられています。

＜上：アカツメクサ、下：ヤマモモ＞

＜ニホンアマガエルの赤ちゃん＞

＜無事に！＞シュレーゲルアオガエルの姿をビオトープの池でやっと目にしたことを No.6 で報告しました。その後どうなったのかと思っていたところ、おたまじゃくしの尻尾のなごりを付けた“ちび”ガエルをハンゲショウの葉に見つけました。ところがこの“ちび”は顔の格好からしてニホンアマガエルです。しかし何はともあれ嬉しいことで無事に大きくなって欲しいものです。

（文と写真：松本正勝）